

グリム童話と『日本の昔ばなし』の比較

－ 昔話に登場する小人たち －

太 田 伸 広

要旨：グリム童話に出てくる小人たちは意外と人が善い。でも、小人たちは、神と悪魔・魔女の中間にあって、悪魔・魔女に傾いた存在か悪魔そのもので、神秘的、地下的、地獄的な所があって、不気味な感じがする。その像は、古くからの民間伝承の様々な精や神々とキリスト教が入り混ざってできたものであろうが、どこか一神教の香が漂う。これに対し、『日本の昔ばなし』の小人たちは、悪魔・魔女の要素はまったくなく、神々に近い存在か、神々、天人そのものである。にもかかわらず、小人たちは、自然宗教的、多神教的雰囲気の中で登場し、地上的、人間的で、あけっぴろげで、子供のように笑ったり喜んだりする、可愛らしい存在である。

はじめに

グリム童話にはよく小人たちが登場するが、日本の昔話には小人たちはあまり登場しないような記憶がある。実際はどうかであろうか。また、一口に小人と言っても、いろんな小人がいるように思われる。これから、それらを調べて、小人像を明らかにしようと思う。

分析の対象は、グリム童話では、いわゆる1857年版のKHMの200篇、203話であり、日本昔話では、関敬吾氏編の『日本の昔ばなし』（岩波文庫）第I、第II、第III巻の240話に限定する。分析をそこに限定した理由は、グリム童話の場合は、1857年版の200篇がグリム童話の決定版であり、KHMに限定すれば類話を可能なかぎり避けることが出来るからである。日本の昔話の場合は、口承されてきた昔話に手を加えることを極力避けて編集したという関敬吾氏の編集方針に意義を見いだしたことと、類話がほとんどないからである。もちろん、グリム童話の場合には、グリム兄弟、とりわけ弟のヴィルヘルムが大いに手を加えて作り上げたことは当然の前提である。グリム童話とはそういうものなのである。ところで、1857年版のグリム童話が200篇、203話となっており、数字が合わないのは、KHM38に2話、KHM39に3話あるからである。KHM105にも3話あるが、第2話、第3話は話としても分析の対象としても、無視してもよい。

グリム童話のテキストは、KINDER- UND HAUSMÄRCHEN GESAMMELT DURCH DIE BRÜDER GRIMM Vollständige Ausgabe auf der Grundlage der dritten Auflage (1837) Herausgegeben von Heinz Rölleke Deutscher Klassiker Verlag である。参考にした日本語訳は金田鬼一氏訳の『グリム童話集』（岩波書店）である。ただし、金田氏のテキストと Heinz Rölleke 氏編集のテキストとはかなり違う。

第1章 小人たちはどれくらい登場するのであろうか

まず、グリム童話には、小人が出てくる話はいくつあるのであろうか。KHMの数としては

27 篇、29 話である。つまり、KHM の 13 Die Drei Männlein Im Wald, 19 Van Den Fischer Un Siine Fru, 25 Die Sieben Raben, 28 Der Singende Knochen, 36 Tischchen Deck Dich, Goldesel, Und Knüttel Aus Dem Sack, 37 Daumesdick, 39 Die Wichtelmänner Erstes Märchen, Zweites Märchen, Drittes Märchen, 45 Des Schneiders Daumerling Wanderschaft, 53 Sneewittchen, 55 Rumpelstilzchen, 62 Die Bienenkönigin, 64 Die Goldene Gans, 68 De Gaudeif Un Sien Meester, 90 Der Junge Riese, 91 Dat Erdmänneken, 92 Der König Vom Goldenen Berg, 97 Das Wasser Des Lebens, 100 Des Teufels Russiger Bruder, 110 Der Jude Im Dorn, 113 De Beiden Künigeskinner, 116 Das Blaue Licht, 161 Schneeweißchen Und Rosenrot, 163 Der Gläserne Sarg, 165 Der Vogel Greif, 166 Der Starke Hans, 175 Der Mond, 182 Die Geschenke Des Kleinen Volkes である。『日本の昔ばなし』では、小人が出てくる話は、『たにし長者』、『かぶ焼き甚四郎』、『山の神とほうき神』、『竹の子童子』、『塩ふき臼』、『宝ふくべ』、『宝下駄』、『一寸法師』、『五分次郎』、『貧乏神』の 10 話である。グリム童話の場合は、203 話のうち 29 話であるから 14% であり、『日本の昔ばなし』の場合には、240 話中 10 話であるから 4% である。この数値であるが、見方にもよるし、またその小人の登場する話の中身、どんな種類の小人かにもよるが、この段階では、『日本の昔ばなし』には小人はあまり出てこない、グリム童話には、小人は比較的良好よく登場すると言っておく。

第 2 章 どんな種類の小人たちがいるか

1. グリム童話の場合

1) 善良な小人

①主人公を助けたり、主人公を泊めてもてなすだけの小人（主人公援助・友好型）

まず、KHM25 Die Sieben Raben である。父に「餓鬼どもめ、みんなカラスにでもなるといいんだ」と呪われ、本当にカラスになった 7 人の兄さんたちを探しに出かけた妹は、世界の果てまで来て、明けの明星から、兄さんたちがガラスの山の中にいることを聞いた。そしてその山を開ける鍵のひよこの脚をもらった。しかし、それをなくした妹は、自分の小指を切り、ガラスの山の戸を開けて中へ入った。すると小さな小人が出てきて、「お嬢ちゃん、何探してるの」と言った。それから小人は「カラスのご主人様は家にいませんが、お帰りになるまでここで待つおつもりなら、お入りなさい。」と言って、カラスたちの食事を持ってきた。

小人の振る舞いはこれだけである。この小人は、この世のものでないガラスの山の中におり、下男のように、呪われてカラスになった兄さんたちの食事の世話をしており、妹にも親切に対応している。

次は、KHM28 Der Singende Knochen である。弟が森へ狂暴な猪退治に出かけると、小さな小人がやってきて、「お前の心は無垢で（汚れを知らず）善良なので、この槍をあげる。この槍があれば、猪に向かっていっても平気だ。猪がお前に危害を加えることはまったくないだろうよ。」と言った。

小人の言ったとおり、弟は小人にももらった槍で、いとも簡単に猪を退治した。というよりも、猪が勝手に槍に向かって突進し、死んだのである。この小人は、弟に初めて出会い、弟が何も言わないのに、弟が猪退治をしようとしてやってきたこと、弟の心が「無垢で善良な」ことを知っている。そして多くの人が殺され、誰もが恐ろしくてやったことのない猪退治をいとも簡

単にできる武器、不思議な黒い槍を持っていて、弟にやる。この小人は、この世のものではない、異次元の世界の存在である。

第3番目は、有名な KHM53 Sneewittchen である。白雪姫は、森の奥深くに入って行き、小さな小屋を見つける。その中に入って、食物とぶどう酒を飲み、寝ていると、辺りが真っ暗になってから、小人たちが帰ってきた。小人たちは寝ている白雪姫を見て、「何という美しい子だ!」と言って大喜びする。小人たちは皆親切である。そして白雪姫が家事をすることを条件に、家にずっといること、何一つ不自由させないことを約束する。また、親切に継母の来襲と陰謀にも注意を促す。「お前の継母に用心するんだよ。お前がここにいることはすぐに継母に分かるだろう。いいかね、決して誰も中へ入れては駄目だよ。」小人たちの注意を聞かず、小売商人のお婆さんに変装した継母に胸を絞め殺された白雪姫を、小人たちは助け、生き返らせる。しかし「私たちが傍にいないときは誰も中へ入れては駄目だよ」という小人の再度の注意にもかかわらず、白雪姫はまたも櫛売りのお婆さんを家の中に入れて、毒殺される。小人たちはまた生き返らせる。3度目、赤いりんごで毒殺された白雪姫を、小人たちは助けようと色々試みたけれども、白雪姫は生き返らなかった。そこで小人たちは、死んだ白雪姫を悼み、3日間泣き続けた。小人たちが死んだ白雪姫をガラスの棺に入れ、傍で番をしていた時、王子がやってきた。王子は、白雪姫を見ないでは生きていけないので、譲って欲しいと言う。小人たちは王子に白雪姫を譲る。ここで、なぜか「die guten Zwerglein」と、小人に gut という形容詞がついている。

ここに登場する小人たちは、白雪姫が（不法侵入、無銭飲食だが）美しいので、大喜びをしたり、母親のように、誰も家の中に入れては駄目だと、白雪姫の身の安全を願って注意をしたり、死んだ白雪姫を悼んで、3日間泣き続けたり、感情や行動が限りなく現実世界の人間に近い。若干現実世界の人間と違うかなという印象を与えるのは、継母（魔女）の来襲を予測していることぐらいである。

第4番目は、KHM62 Die Bienenkönigin である。石ばかりで、人気がなく、呪われたと思われのお城の中の一番奥の扉のなかの部屋に、灰色の小人が一人テーブルのそばに座っていた。3人兄弟の王子が呼び掛けると、立ち上がって、出てきた。そして黙ったまま彼らをご馳走がいっぱいある食卓へ案内する。王子たちが食べたり飲んだりした後、小人は王子たちを寝室に案内した。翌朝、小人が一番上の王子の所へやってきて、黙ったまま、王子を石板の所へ案内した。そこにはお城を魔法から解放するための3つの課題が書かれていた。この課題をやり損なうと誰でも石になるということだった。

小人が登場してきてやることはこれだけである。したがって、この小人がどんな者かはよくわからない。しかし、お城を魔法から解放するための課題が書かれた石板に3人の王子を案内したということは、魔法をかける側ではなく、魔法を解く側についていると判断してよいであろう。

第5番目は、KHM68 De Gaudeif Un Sien Meester である。息子を泥棒（実際は自在に変身する魔法使い）の師匠（de Gaudeifs-Meester）に預けた父親は、1年後、魔法の使い方と盗み方（hexen un gaudeifen）を学んだ息子が何に変身したかを言い当てるか、それができない場合には、謝礼として200ターラーを払わなければならない。1年後、父親は泥棒の師匠の所へ行こうと出かけたが、そのどちらもできずに、悩みながらとぼとぼ歩いていた。すると小人がやってきて、父親に事情を聞き、息子さんは小鳥に変身していると教えてくれた。変身の術を

見破られた息子の師匠の泥棒は不思議がり、悪魔（de Düvel）が教えやがったなと言って悔しがる。

ここに登場する小人は、突然現われ、困り果てた見知らぬ父親を助ける。泥棒の師匠が悔しがったように、小人には悪魔のように(?)魔法(変身の術)を見抜く力がある。

第6番目は、KHM163 Der Gläserne Sargである。仕立屋さんが、大きな森のなかに入ると、灯りが見えた。その方へ行くと、葦と燈心草でできた小さな家があった。仕立屋さんが勇気を出してドアをノックすると、ドアが開いた。灯りに照らされて、斑色の雑巾みたいなぼろの服を着た、真っ白な髪の高齢いた小人が現われた。仕立屋さんが宿を頼むと、最初は、よそへ行くと、断っていた小人の爺さんであったが、食物と立派な寝床を提供してくれた。

この森のなかに住む小人は、仕立屋さんを泊めて、食事を与えただけの、ごく普通の人間のように見える。しかし、翌朝伯爵の娘の兄の牡鹿と魔法使いの牡牛の格闘があり、牡鹿が角で牡牛を突き刺して殺し、見ていた仕立屋さんを連れ去った。鹿が仕立屋さんを連れていった所が、ガラスの棺に閉じこめられた妹の娘がいた所であった。だから、普通に見える小人も、異次元の魔法の世界と何らかのつながり、接点を持っている。あるいは、小人が異次元の世界へ入る扉の役目を果たしている。つまり、小人は何も言わないで、ただ単に宿と食事を提供しただけであるが、このことが、ストーリー上は、主人公の仕立屋さんが伯爵のお姫さまを魔法から解放するのに、決定的な役割を果たしている。

②主人公の意向や命令を忠実に実行する小人（主人公の命令実行型）

最初は、KHM91 Dat Erdmännekenである。昼時小さな小さな小人が人気のない城に現われ、パンをねだり、もらうとわざと落とし、それを拾ってくれと言う。末の阿呆のハンスは、自分で拾えないのかと言って、小人を袋叩きにした。すると、小人は許しを請い、行方不明のお姫さま方のいる場所を教えてくれた。また、兄二人に用心するようにも言った。小人の言ったとおり、兄二人に裏切られ、井戸の中にとり残された阿呆のハンスが壁に掛かっていた笛を吹くと、地妖がたくさん(so viele Erdmännekens)現われ、ハンスの望みを聞き、ハンスを地上に連れ出した。長男と次男は、小人がパンを拾ってくれと言うので、拾っていると、小人に髪の毛を捕まれ、杖で殴られた。

このメルヘンに登場する小人(地妖)の振る舞いは、非常に珍しく、他にあまり例を見ない。善良な末っ子の阿呆のハンスを助け、腹黒い兄二人をやっつける点では、他のメルヘンと全く同じである。しかし、兄二人がやっつけられたのは、この時点では、お人好しで、小人に言われた通りのことをしたまでである。どうみても小人の方が悪者に見える。逆に、ハンスは小人のやれと言うことを拒否し、小人をこっぴどくやっつけた。それなのに、小人はハンスの味方になった。どうみても悪者の小人が力の強いハンスに屈伏し、いいなりになったとしか見えない。悪役の小人ならば、悪役に撤するはずであるが、この小人はそうではない。例外的な珍しい小人である。

次は、KHM113 De Beiden Künigeskinnerである。このメルヘンでは、お姫さまが「アルヴェッガース、出て来て!」と言うと、数多くの地妖たちが出てきて、お姫さまの言う3つの難題をいとも簡単にやり遂げる。そればかりか、仕事が終わるとその報告もする。そしてお姫さまが「アルヴェッガース、お帰り!」と言うと、姿を消す。最初の難題は、3時間で、大きな森の木を全部伐り倒し、伐った木を山に積むことである。次の難題は、3時間で池を漂白、鏡のようにぴかぴかにし、あらゆる種類の魚がその池の中にいるようにすることである。第3番目の難

題は、3時間で藪を全部刈り取り、山上に最も素晴らしい城を建てることである。

これらの地妖たちは、超能力を持っているばかりか、その超能力を、お姫さまの下僕のように、お姫さまの言う通りに使う。

第3番目は、KHM116 Das Blaue Licht である。魔女が持っていた青い灯りで、兵隊さんが煙草に火をつけ、煙草を吸い、煙がもくもくとあがると、小さな黒い小人が現われ、「御主人、ご用命は何でしょうか。私はどんなことでもあなた様にお仕え致さなければならないのです。」と言う。小人がしたまず最初の兵隊さんへの奉仕は、兵隊さんを井戸の中から地上に連れ出すことであった。次は、兵隊さんの命令で、魔女を殴り殺すことだった。3つ目は、兵隊さんにひどい仕打ちをした王様のお姫さまを、下女のように奉公させるための、連れ出し役である。4つ目は、王様の悪巧みを暴いて、兵隊さんが王様に捕まるのを防いだことである。5つ目は、兵隊さんを捕まえて死刑にしようとしていた裁判官とその手下を殴り殺し、王様をひれ伏させて、降参させたことである。

このように、兵隊さんが青い灯りでパイプに火をつけさえすれば、黒い小人が現われて、兵隊さんの家来になって、兵隊さんの命ずることは何でもやってくれる。これは下男としての小人である。

③善い主人公の力になり、悪い主人公に懲罰を加える小人（善悪対応型）

最初は、KHM13 Die Drei Männlein Im Wald である。地面が石のように凍り、山も谷も雪が沢山積もっていたある冬のこと、紙の服を着せられ、オランダイチゴを取ってこいと言われた継子娘が堅いパンを一切れだけもらって、森へ入ると、小さな小屋があり、小さな小人が3人外を覗いていた。娘は挨拶をし、小人たちに言われるままに、堅いパンを二つに割って、小人たちにあげた。小人たちは、娘に箒を渡し、裏戸口の前の雪かきをするように言った。娘が雪かきをすると、赤く熟れたすばらしいオランダイチゴがたくさん出てきた。小人たちは、娘が礼儀正しく、善良で、施しものをしたので、一人が一つずつ娘に贈物をあげた。その贈物は、日増しに美しくなること、一言しゃべるごとに口から金貨が出ること、王様のお妃になることであった。娘から話を聞いた実の娘も、毛皮の外套を着せてもらい、バターパンとお菓子を持って出かけていった。こちらの娘は挨拶もせず、パンとお菓子も自分一人でも足りないと言ってやらず、雪かきもしない。そこで、小人たちの贈物は、日増しに醜くなること、一言しゃべるごとにガマガエルが口から出てくること、不幸な死を遂げることであった。

第2番目は、KHM64 Die Goldene Gans である。阿呆の末っ子が森へ入ると、年老いた灰色の小人に出くわした。末っ子が小人がおくれと言った灰のお菓子と酸っぱいビールと一緒に食べようとして、腰をおろして取り出してみると、それは卵のお菓子と良質のぶどう酒に変っていた。それから、小人は、末っ子が善い心の持ち主で、自分のものを喜んで他人に分け与えるので、末っ子に幸運（黄金の鵝鳥）をプレゼントした。さらにこの小人は別の男に変身し、王様から末っ子に課せられた難題を代わって次々に解決してやる。1つは、地下室一杯のぶどう酒を飲み干すこと、2つ目は、国中のパン粉で作った巨大なパンの山を1日でたいらげること、3つ目は、水陸両用の舟を造ることであった。ところが、長男と次男は、立派な上等の卵のお菓子とぶどう酒一本持って、森へ木を伐りに行き、小人にあったが、それらを分け与えなかったばかりか、冷たく「よける!」と言って、通り過ぎていった。そのため木を伐る際に、長男は腕を、次男は脚を斧で切るはめになった。

第3番目は、KHM97 Das Wasser Des Lebens である。王様の病気を治すことのできる「命

の水」を子供3人が探しに出かけた。末っ子がしばらく行くと、道端に小人が立っていた。小人は、礼儀正しく応答した末の王子に「命の水」のある場所を教え、呪われた城に入って「命の水」を取るのに必要な「eine eiserne Rute und zwei Laiberchen Brot」を与えた。さらに小人は、末の王子が呪われた城から持って帰った「das Schwert und das Brot」に不思議な力があることを教え、兄の王子たちは腹黒いから注意するように忠告した。ところが、小人を「ちび」呼ばわりし冷たくあしらって先へ行った兄たちには、小人は腹を立てて呪い、彼らを峡谷に閉じ込めてしまった。

第4番目は、KHM165 Der Vogel Greifである。お姫さまの病気を治すために、末っ子のハンスが籠のなかに粘土を入れて、お城をめざして出かけると、「鉄のような色の、つんつるてんの着物をきた小さなこびと」（金田訳）に出くわした。小人が中に何が入っていると聞いたので、ハンスがお姫さまの病気を治すことのできるりんごだよ、と答えた。お城に着いてみると、粘土が本当にりんごになっていて、それを食べたお姫さまは、すっかり元気になった。さらに、王様がお姫さまをやる第1の条件として出した、水陸両用の舟を造る難題も小人がやりとげる。第2の難題、朝から晩まで、兎百羽を1羽でもなくならないように番をすることも、ハンスが口笛を吹きさえすれば、逃げた兎も自然に戻ってくるようにして、小人が解決してやる。ところが、本物のりんごを籠に入れて出かけた長男は、鉄色の小さな小人に中に何が入っていると聞かれて、「かえるの肢」と答えた。すると本当にそうになっていて、お城からたたき出された。本物のりんごを持って出かけた次男も、鉄色の小さな小人に中に何が入っていると聞かれて、「靴刷毛」と答え、靴刷毛をお城に持っていき、お城から鞭でたたき出された。水陸両用の舟を造るときも、同じであった。造っているものが何かと小人に聞かれ、嘘をついた長男と次男は、造ることができなかった。

この小人は、阿呆だが正直な人間の味方をし、嘘をつく者を懲らしめるようである。

第5番目は、KHM182 Die Geschenke Des Kleinen Volkesである。小人の男女が、月夜に丘の上で、歌を歌いながら手をつないで輪舞していた。輪の真中に、斑模様の上着を着て、真っ白な髭を胸まで垂らした老人が座っていた。老人は仕立屋さんと金細工師に輪に加わるよう合図した。二人が輪のなかに入ると、老人は幅の広い小刀を磨ぎはじめ、二人を見つめた。そして目にもとまらぬ早さで、二人の頭の毛と髭を剃り落とした。それから、山のように積んだ石炭をポケットに入れて持ってかえるように、身振り手振りで示唆した。そして鐘が夜中の12時を打つと、小人たちはすべて消え失せた。二人がポケットに手を突っ込んでみると、石炭は純金に変わっていた。

欲張りな金細工師は、袋を2〜3肩に担いで、またあの丘に出かけて行った。そして袋に石炭を入れるだけ入れて持って帰った。帰ってみると、石炭は石炭のままであったばかりか、前にもらった純金まで石炭に変わっていた。おまけに、背中の瘤と同じような瘤が胸にもついていた。

2) 悪の小人

①悪事のみ働く小人（悪者型）

これはKHM166 Der Starke Hansに出てくる小人だけである。荒れ果てたお城で、縦ねじり（Tannendreher）が料理をしていると、萎びて縮んだ小さな年老いた小人がやってきて、肉をねだった。肉をやらないと、その小人は、縦ねじりの体に飛び上がり、彼をぶちのめした。岩鳴らし（Felsenklipperer od. Steinklipperer）も同じような目にあった。

強者ハンスは、小人に肉をやったが、何度やってもまたくれと言うので、ついに頭にきて、小人を殴りつけた。小人は大急ぎで逃げた。後で、ハンスは小人が逃げ込んだ岩穴のなかに入って行き、絵のように美しい乙女の側に座って、尾長猿のように、歯を剥出しにしてにまにま笑っていた小人を殴り殺した。そのとたんに、乙女の体の鎖が解けた。

この小人は、伯爵によって閉じ込められたお姫さまの監視役で、お姫さまをたっぷり責め苛んだ (Leid und Drangsal genug) 悪者だが、死ぬと、お姫さまの鎖が解けるなど、呪いや魔法の雰囲気漂わせている。

②呪いをかける魔女のような小人 (魔女類似型)

KHM161 Schneeweißchen Und Rosenrot に出てくる小人はどのようなものであろうか。小人が死んで、熊の皮が抜け落ち、人間の姿に戻った王子が言う。「私はある王様の子で、私の宝物を盗んだ神をも恐れぬ (澆神の) 小人に呪われ、野性の熊となって森の中をさまようことになったのです。私にかけられた呪いは、小人が死ぬまで解けないことになっていたのです。」

ここまでは、この小人は人に呪いをかける魔女のようであるが、この小人、他にも色々な振る舞いをする。冬の間は地下にじっとしているが、暖かくなると、地上へ出てきて盗みを働く。盗んだ黄金や真珠は貯えている。小人たちの穴に落ちたものは、まず二度と陽の光を見ることはできない。この他、木を割って薪を作ったり、魚釣りをしたり、鷺にさらわれかけたりする。

小人の容貌は、やたらと長い (50~80センチ) 白い髭を生やし、赤い火のような目をし、しなびた年寄の顔をしている。

③悪魔の小人と悪魔のような小人

あ) 悪魔 (悪魔型)

まず最初は、KHM92 Der König Vom Goldenen Berg である。船が沈没して財産を失った商人が畑地を行ったり来たりしていると、小さな黒い小人が突然側に立っていた。そして家で最初に脚にぶつかるものを12年後にここに持ってくるならば、金は欲しいだけやると言った。商人はそれは犬だと思って、署名入りの証文を小人に渡した。商人が家に帰ると、最初に脚にしがみついていたのは、男の子であった。1か月後、屋根裏部屋に金が山ほどあった。12年後、父と息子は、畑地に出かけていき、息子が輪を作り、二人はその中に入った。それから、親子と黒い小人は話し合い、息子を小舟に乗せ、足で蹴って、成行に任せることで、話がついた。

ここに登場する小さな黒い小人は、Teufel (悪魔) と言われてはいない。しかし、小人の行動、振る舞いは悪魔そのものである。しかも父親に事情を聞いた息子が「あの黒い奴は、ぼくを思うようにはできないよ。(der Schwarze hat keine Macht über mich.)」と言っている。この der Schwarze とは、悪魔のことである。

次は、KHM100 Des Teufels Russiger Bruder である。除隊になった兵隊さんが森のなかに入っていくと、小さな小人に出くわした。小人は悪魔で、兵隊さんが悪魔の従僕になり、7年間仕えれば、その後は自由で、一生涯お金持ちにしてやると言った。ただし、その間、体を洗うこと、髪をとくこと、ふけを弾き飛ばすこと、爪や髪を切ること、涙を拭くことをしてはならないという条件があった。兵隊さんは、悪魔との取引を承諾し、地獄へ行って、釜の火を焚きつけるなど、様々な雑務をこなした。また悪魔から音楽も習った。7年間の奉公が済んだとき、小人はハンスに、掃き寄せたごみ屑を、お前の給与だ、背のうへ入れて持って帰れと言った。帰って見ると、ごみ屑は純金になっていた。

宿屋の主人に黄金の入った背のうを盗まれた兵隊さんが、地獄へ行って悪魔に窮状を訴える

と、悪魔は、兵隊さんの体をきれいにしてくれ、宿屋の主人が盗んだ純金を返さなければ、悪魔自身が出かけて行って、地獄へ引き連れてくる、と言えと忠告してくれた。そうして宿屋の主人から金の背のうを取り返した。

い) 悪魔のような小人（悪魔類似型）

KHM55 Rumpelstilzchen に出てくる小人を見てみよう。王様に藁を紡いで黄金にしろ、と言われた粉屋の娘が不安になり泣いていると、小さな小人が現われ、首飾りと交換で、藁を紡いで金にしてくれた。2度目は指輪との交換が条件だった。3度目は、王様のお妃になったときにできた最初の子をやるという条件で、藁を金に紡いでもらった。小人がお妃の所へ約束の子供を取りに来た時、お妃が国中の宝物をあげるから子供は勘弁して欲しいと言うと、小人は生きたものの方が世界のどんな宝物よりも好ましいと言って、拒否した。お妃が泣きだすと、小人はお妃に同情し、自分の名前を言い当てるならば、子供は取らないと言った。お妃は必死で小人の名前をさがし、やっとのことで小人の名前をつかんだ。小人は、自分の名前を言い当てられると、「悪魔が教えやがったな」と叫びながら、自分で自分の体を二つに裂いてしまった。

④魔法使いの小人（魔法使い型）

KHM110 Der Jude Im Dorn に登場する小人はどうか。下男が藪の側を通ったとき、小さな小人が現われた。小人は、私は金もなく働くこともできない老人だ、その3ヘラーをおくれ、と言う。下男が金をやると、小人は、下男の3つの望み（百発百中の吹き矢、すべてが踊りだす胡弓、頼みごとを相手が拒否できない力）をかなえてやる。

小人が下男に3つの望みをかなえてやると言ったとき、下男は、「そうか、お前は魔法を使うことのできる奴だな。（◇Aha◇, sprach der Knecht, ◇du bist einer, der blau pfeifen kann; ...◇）」と言う。この blau pfeifen は、hexen という意味なので、この小人は、魔法使いとして分類する。

3) ヴィヒテルメナー（小妖精）という小人（小妖精型）

この小人は、KHM39 Die Wichtelmänner と KHM175 Der Mond に登場する。

前者には3つの話がある。

最初の話では、裸の小人が真夜中に現われ、靴職人に代わって、靴をあっという間に完璧に仕上げ帰っていく。お礼に服をもらおうと、喜んで踊りながら家から出て行き、二度と姿を現さなかった。

2番目の話では、不幸な女中がヴィヒテルメナー（小妖精）から洗礼立会人を頼まれ、山の中の彼らの住まいに連れていかれた。女中は彼らに頼まれ、豪華な彼らの家（真珠をちりばめた黒檀のベッド、金糸で縫われた毛布、象牙の揺り籠、金のたらい）で、3日滞在した。楽しいときを過ごし、帰るとき、彼らは黄金を一杯くれた。ところがその3日は、この世の世界では、7年もの歳月であり、女中が元の家に戻ってきたときは、使えていた主人はもう死んで、いなかった。この小妖精の住む世界はまったくの別世界で、まるで日本昔話の竜宮城のようである。住んでいる場所が小妖精の場合は山で、竜宮城は海という違いこそあれ、夢のように素晴らしいときを過ごしたり、現実世界の時の流れとは違い、ゆったりと時が流れ、1日が非常に長い点はよく似ている。

3番目の話は、上記の二つのメルヘンとは全然違う話である。ここに登場する小妖精は、子供をさらっていき、代わりに、取り替え子を置いていく。取り替え子は、目が据わり、頭でっ

かちで、飲み食いばかりする。ところが、卵の殻でお湯をわかすと、取り替え子が笑いだす。そうすると、突然小妖精たちが現われ、実の子を返し、取り替え子を連れて帰る。

最後は、KHM175 Der Mond である。4人の若者が買ってきたお月さまを高い檜の木の上につると、月明かりに惹かれて、小妖精たちが岩穴から現われ、赤い服を着て、草原で輪舞する。このメルヘンの後半で、月を買って持って帰ってきた4人の若者が死んで、お月さまもなくなり、また暗闇が支配したとき、地下の世界 (die Unterwelt) から死人たちが現われ、自分たちの天国が来たかのように大騒ぎをする。これと違い、小妖精たちは、月明かりを喜び、姿を現して輪舞する。だから、小妖精たちは地下の世界の者ではない。もちろん聖ペートルスが門番をしている天国の者でもない。

4) 冒険をする親指ほどの小人 (親指小僧型)

これに属するのは、KHM37 Daumesdick と KHM45 Des Schneiders Daumerling Wanderschaft と KHM90 Der Junge Riese の3篇だけである。この3つのメルヘンに登場する小人は、KHM37では、Nun geschah es, daß die Frau kränklich ward, und nach sieben Monaten ein Kind gebar, das zwar an allen Gliedern vollkommen aber nicht länger als ein Daumen war. となっており、KHM45では、Ein Schneider hatte einen Sohn, der war klein geraten und nicht größer als ein Daumen, darum hieß er der Daumerling. Er hatte aber Courage im Leibe, となっており、KHM90でも、Ein Bauersmann hatte einen Sohn, der war so groß wie ein Daumen, und ward gar nicht größer, und wuchs in etlichen Jahren nicht haarbreit. となっている。農民、仕立屋という違いこそあれ、すべて人の子である。ここが今までの小人と違うところである。この小人たちは、私が本稿で分析の対象としている本来の小人、異次元の世界の小人ではない。KHM37とKHM45の親指小僧は、前者では、牝牛に食われて胃袋のなかに入り、またその胃袋ごと狼に飲み込まれるが、狼の腹の中から、狼をうまくだまして、父母の元へ帰ったり、後者では、針を刀代わりにし、強盗と一緒に銀貨を盗んだり、牝牛に飲み込まれたり、牛とともに腸詰めになれたり、最後は自分をくわえた狐をいいくるめて家に辿り着く、というように、現実の世界ではありえない冒険をする。しかし、それは親指小僧が異次元の世界の存在だからではなく、メルヘンの世界の登場人物だからである。

5) 比喩としての小人 (比喩型)

KHM19 Van Den Fischer Un Siine Fru では、妻の横に近衛兵たちが背の高さの順に並んでいる。その一番小さな近衛兵が小人 (Dwark) と表現されている。

KHM36 Tischchen Deck Dich, Goldesel, Und Knüppel Aus Dem Sack では、「お膳や御飯の支度!」と「金貨を吐き出す驢馬」を盗んだ宿屋の主人が「棍棒よ袋から出よ!」の棍棒にこっ酷く殴られ、それを Kobold (=Wichtelmännchen) と呼んで、恐れた。これは、宿屋の主人がドイツの民間に伝承されている小人の Kobold のいたずら好きの面を念頭において言ったままで、実際は棍棒のことである。

2. 『日本の昔ばなし』の場合

1) 主人公援助・友好型の小人

これは『竹の子童児』に登場する小人である。

三吉という桶屋の小僧が竹山に立っていると、「三ちゃん、おっば竹のなかから出してくれ」と、いったそうである。それでいそいで鋸でその竹を伐り倒したところが、小まんか子供が出て来たそうである。三吉が「あんた、何でな」と、その人を掌（てのひら）にのせてたずねた。「わるか竹の子にひっ掴まえられて、竹の中に入れられたもんじゃで、天に帰ることが出来んじゃったたい。それでちょうど三ちゃんが来たもんじゃって、助けてもうろうたたい。こぎゃんうれしかことはなかったばい」といった。それから三吉が、「俺が名ばなしゅ、あんたは知っととな」ときくと、「俺らあ、世界のことは何でも知っとる」というので、三吉が何という名かとたずねると、「竹の子童児」といった。あんたは年はいくつかときくと、「千二百三十四歳たい」とこたえた。「すぐ天に帰ろうごたつとばってん、恩返しせんば天に帰ってから、お姫さまにしからるるで、お礼ばしてから帰つとたい」といった。「俺ら七つだけ、三ちゃん好きなこっばしてやったい」といった。「ほんかい、うそじゃなかな」というと、「天人はうそはいわんばい」といい、三吉をほんとうの侍にした。

2) 貧乏神型の小人

これは『貧乏神』に出てくる小人である。

あるところに、貧乏な夫婦があった。年越しの米をかう金がないので、女房が績（う）みためた芋績玉をもって町へ行った。一つも売れなかったので、炭売りの爺の炭と交換して家に帰った。女房は怒って寝てしまった。夫は、火をどんどんおこして背中あぶりはじめた。家のなかから急に暖まって、戸や壁も汗ばんだ。すると、あちこちで「ああ熱いあつい。」「この家を出てしまおう」という声がした。そして「長年のあいだ、厄介になったんだからなにか贈物をおいて行かなくてはならぬ」と言って米俵と魚荷を置いて行った。男は「どうもふしぎなこともあるものだ」と思って、立って小窓からのぞいて見ると、四、五人のみにくい小人どもがいま家から出て行くところであった。そして一人の老人が外の方から入って来た。門口で行きあって、老人は小人たちを見るとひどく怒って、「きさまたちはまだこの家におったか、早くどこへなりとも消えうせろ」といって、ひどく叱った。すると小人たちは地面にひれ伏して「はいはい、もうこの家も熱くなってとてもいたたまらなくなったから、いま出て行くところでございます」といいながら、一人一人その老人の膝の下をくぐってどことなく行ってしまった。そして、それと入れちがいに、その老人が家に入ってきた。それからというものは、この家はだんだん福々長者になった。

貧乏神だけあって、夫婦を貧乏にしていたのであるが、出て行くとき、長年お世話になったからと、米俵と魚荷を置いていくなど、何かほのぼのとしたところがある。

3) 善悪対応型の小人

最初は『山の神とほうき神』である。

夫はたいそう小心者で、しっかりもので、成功した「女房の金使いの荒いのを戒めたいものだ」と心をくだいでおりました。旅の六部にそのことをたずねて見ると、「それはぞうさもないことだ。月の十五日の朝、朝日ののぼるときに九十九戸前の真中の土蔵の屋根の上を見るがよい。九十九戸前のその真中の土蔵の屋根の上には、朝日の影に紫のひただれをきた小人の老人が三人で、赤い扇をひろげて、朝日の舞をもうているのが見える。その三人の小人のまん中の翁の左の膝を、うつぎの弓に蓬の矢をつがえて射るがよい。そうすると、お前の思うように

なります」と、教えてくれました。月の十五日になると、六部の言った通りで、男はその真中の小人の翁の膝を射ました。すると、左の膝は折れて小人の翁たちは消え失せてしまいました。それから、これまでと変り、貧乏になってしまいました。訪ねて来る人もだんだん少なくなりました。そこで夫はたいそう怒って、みんな女房が悪いからだといって、下女を一人つけて家から追い出してしまいました。女房は下女をつれて、どこというあてもなく歩いて行きました。そのうち日が暮れて、暗くなりました。もう歩く力もなく、道端に下女と一夜を泣き明かしました。夜が明けたので起き上がって、これからどこへ行こうかと相談をしておりました。そこへ若い美しい三人の娘が通りかかりました。「あなたたちは、どこへ行かっしゃる」と、女房は娘たちにたずねました。「私たちは、あの山この山越えて、雉の一声の里というところに行くものです。二人は無事ですけれども、一人の娘は足を痛めてたいそう難波をしますよ」と、答えました。女房たちは三人の娘たちの後を追って行きました。山路がけわしくて、行きなやんでいるうちに、その娘たちの姿を見失ってしまいました。そのうちにまた日が暮れました。今夜もまた野宿するのかと思っていると、遠くの方に灯りが見えました。行くと汚いあばら屋がありました。家の中には、娘がたった一人いました。「今晚一ばん、どうかとめて下され」と、頼みました。娘は「こんなあばら屋で食べる物も着るものもないけれど、これからどこへ行くにもたいそう難波だろうからお泊りなされ」といって、泊めてくれました。娘は「何もありませんから、大根をとって来て煮て上げましょう」といって、外へ行って大きな大根をもって来ました。それを煮て食べさせました。それを食うと、たいそうよい味がしました。翌朝、二人は目を覚ましましたが、娘はどこに行ったかおりませんでした。下女が昨夜の大根畠にいて見ると、大根を抜いた跡から水がわき出ておりました。喉がかわいているので、その水をすくって飲むとりっぱな酒でした。二人でいって飲むと、気持ちよく酔うて眠ってしまいました。夕方になって目を覚ましたけれども、まだ娘は帰って来ませんでした。翌日になっても、娘は帰って来ませんでした。

女房はこの酒を売って、また長者になり、夫はもとの女房の下男になった。

次は、『塩ふき臼』の小人である。

弟が山を越えて行くと、一人の白ひげをのぼした老翁が板柴を集めていました。「お前はどこさ行けや」とたずねました。「今夜は年とりの晩だども、お歳神さまに上げる米がないので、あてもないがこうして歩いています」と答えました。「それは困ったことだ」老翁はそういって小さな麦饅頭をくれました。「この饅頭をもって、あそこの森の神さまのお堂のうしろに行くと穴があるが、そこに小人たちがいてお前に饅頭をくれろというから、金でも物でもなくただ石の挽臼ととりかえるならばやってもいいといえ。小人たちはひどく饅頭をほしがるから」と教えました。弟はお礼をいって老翁とわかれ、教えられた森の中のお堂の後に行くと見ると、なるほど穴がありました。中に入っていくと、大勢の小人ががやがやさわいでおりました。小人どもは、弟が手にもっている麦饅頭を見つけると、「それをぜひ俺たちにくれろ」といって、黄金を弟の前にならべて出しました。「いやいや、そんな金など俺はいやだ。石の挽臼とならとりかえっこしてもよい」といいました。小人どもは「それは困ったなあ、この石の挽臼は二つとない宝物だが仕方がない」といって、挽臼を渡しました。峠に来ると、老翁がまだいました。「その臼は右にまわせば思うものが出ほうだいに出るし、左にまわすと出がとまるものだ」と教えてくれました。

弟はその臼で、米、塩鮭、立派な家、土蔵、長屋、厩、馬七疋、餅、酒、菓子を挽き出した。

その臼を盗んだ兄は、船に乗って海に出て塩を出したのはよいが、止め方を知らなかったので、次々に出てくる塩とともに沈没してしまった。海の水が辛いのはそのせいである。

最後は『宝ふくべ』の小人である。

爺が清水観音にまいって、七日七夜のお籠りをしました。帰り際爺のうしろからふくべが一つころがって来ました。「これは全くふしぎなふくべだ。どれ、それでは俺がだっこして見よう」といって、爺がふくべを抱きあげると、その中からひょっこりと二人の童がとび出しました。爺がおどろいていると、二人の童は笑いながらこういいました。「爺、おらたちは観音さまからのいっつけで、爺のところに来た金七と孫七というものだ。これから爺に何でもいいことをしてあげるのだからいっつけてくれ。さしあたり爺は何を欲しいのか、いってごらんよ。」爺は酒、団子、ご馳走を出してもらいました。ところが、博労がふくべを強引に貰い受け、殿さまに献上して、村でも貰おうとして、殿さまの前でふくべからご馳走を出そうとしたが、ご馳走どころか雫一滴も出なかった。

4) 一寸法師型の小人

最初は『たにし長者』に登場する小人である。

ある日、いつものように、名子が田の草をとりに行って、「水神さま、もうし、そこらあたりにいるたにしのような子供でもよいから、どうかわたしに、子供を一人さずけてたもれ。あなとうと、あなとうと」といって、心から水神さまに祈っていると、どうしたことか、急におなか痛んできました。それからしばらくすると、一匹の小さなたにしが生まれました。

どうしたことか、生まれてから二十年もたったけれども、たにしの息子は少しも大きくなりませんでした。一言も口をきいたことがありませんでした。それでも、ご飯は一人前たべました。ところがたにしは、突然ものをいうようになりました。そして大家の長者どのに納める年貢の米を、俵のあいだに乗って、馬方節をうたいながら、運んでいきました。旦那さまが出て見ると、たにしが年貢米をもって来ていました。

長者どのはたにしを、なんとかして家の宝にしようと考えました。「たにしどの、わしのところに娘が二人いるが、その中の一人を、お前の嫁にやってもよいが。」たにしは、それを聞いて、たいそう喜びました。姉嬢は「誰が、虫けらのところなんか、嫁に行くものか。おらいやだよ」といって、どたどたと荒い足音を立てて、出て行ってしまいました。妹嬢の方は「父さまがせっかくああいう約束をされたことですから、わたしがたにしのところへ嫁に行きます。どうか心配しないで下され」といって慰めました。

嫁が薬師さまに参詣している間に夫のたにしがなくなったので、田の中に入ってさがしましたが、いくら探しても、夫のたにしが見つからないので、いっそうのこと、田の中の深い泥沼の中に入って死んでしまおうかと思って、深みに飛びこもうとしました。すると、後の方から、誰か「これこれ、娘、何をすると、声をかけるものがありました。ふり返ってみると、立派な男が立っていました。「わしは水神さまの申し子で、これまでたにしの姿でいたが、今日そなたが薬師さまに参詣してくれたので、このように人間の姿になることが出来た。わしは水神さまにお礼詣りをして、ここへ帰って来ると、そなたがいけないので、今まであちらこちらと、尋ね歩いていたのじゃ」と、話してきかせました。

この日本の昔話には、生まれた子供がたにしであったのに、まったく呪いがない。また、「誰が、虫けらのところなんか、嫁に行くものか」と、たにしを馬鹿にし、父の望みに逆らっ

て結婚を拒否したのに、姉娘への罰もない。グリム童話では考えられないことである。

次は『一寸法師』である。

仲のよい夫婦が住吉さまへ行って、「住吉さま、指先ほどの小さい児でよいから、どうか子どもをさずけて下さい」と、一心に拝みました。すると、十月目にかわいらしい男の児が生まれました。ところが、その生まれた児は小さくて指の先ぐらいしかなかった。それでも一寸法師と名をつけてかわいがって育てました。

ある日、立派な家のお姫さまは、一寸法師をつれて、観音さまへお詣りに行きました。その帰り道で二匹の鬼に出会いました。鬼がお姫さまをつかまえようとしたので、一寸法師は腰に刺していた針をふりまわしたが、鬼に丸のみにされてしまいました。しかし、刀をふりまわして腹の中をつつきまわりました。鬼はおどろいて、一寸法師をはき出しました。こんどはもう一人の鬼の目の中に飛びこみ目をいやというほどついたので、鬼はとうとう逃げてしまいました。

鬼が落としていった打出の小槌で、お姫さまが「せい出ろ、せい出ろ」と小槌をふると、ふしぎに一寸法師の体が、急にどんだんのびて立派な一人前の侍になりました。

この昔話では、お姫さまは鬼から救ってもらったし、一寸法師も立派な侍に成長したのに、結婚しない。これもグリム童話ではありえないことである。

最後は『五分次郎』である。

昔、あるところに爺さんと婆さんとがありました。ある時、婆さんが「子供が一人あれば、われたちはどんなにしあわせかわからんがの」と、爺さんにいいました。「わしもそう思う。一つ観音さまに願をかけてたのもうではないか」と、爺さんも申しました。そこで二人はまい日まい日参詣して七日になりました。ところが婆さんの左手の親指がふくれて来ました。おしまいの七日目に婆さんの指から小さな男の子が生まれました。丈が五分ばかりしかないのに、五分次郎と名をつけて大切に育てました。いつまでも五分くらいの大きさだったけれども、勇気があって、強い子になりました。

五分次郎は水がすきで、笹の葉の舟にのって、楊枝をさおにして乗りまわしていました。それから海に流され、鯛に飲まれ、漁師の網にかかり、売られて、料理され、そしてまた家に帰ってきました。

五分次郎は鬼が島征伐に行きました。鬼に飲み込まれた五分次郎は針の剣をもっていたので、鬼の腹の中をくさくさとあちこちつき刺しました。五分次郎は腹の中から、「宝物を差出して、降参すれば許してやる」というと、鬼は悲しい声で「どうか許してくれ」といいました。それから鬼の宝物を馬につんで、自分もその上に乗って家に帰りました。

5) 体が虫のように小さくなった者（身体縮小型）

『室下駄』に出てくる虫のように小さな者を見てみよう。

一人の孝行息子があった。欲ばりの伯父貴に金を無心すると断られた。帰り道で寝てしまった。すると、一人の老人がやって来て、一本歯の下駄をくれた。この下駄ははいて転ぶと、ころぶごとに小判が出てくる。けれどもあまりごろごろころんでいると、背がひくうなると教えてくれた。息子は夢からさめて、大喜びでさっそくころんでみると、老人のいう通りに小判が出た。伯父貴は一本歯の下駄をよこせといった。息子はこの下駄ばかりはやれないとことわったが、むりにもぎとっていった。伯父貴は家に帰ると戸をしめきって、庭に大風呂敷をしいて、

その上で下駄をはいてごろごろとこがって見た。見る間に小判は山のように出て来たが、伯父貴は体がしだいに小さくなって、しまいには虫のように小さくなってしまった。息子が戸を開けて見ると、庭の隅の方に小さい者が動いていた。

虫のように小さな者は、このように普通の人間が縮んだもので、本来の小人ではない。

6) 洒落としての小人（洒落型）

これは『かぶ焼き甚四郎』である。

子供たちにいじめられていた鷹を救ってやると、鷹が河童を捕まえてきました。河童が「宝物をやるから、はないてけろ」というので、甚四郎は河童をゆるしてやりました。河童は延命小槌（えめこづち）と延命小袋という宝物をくれました。女房は「そんじゃ、米と倉とを出しましょう」といいました。甚四郎は「こめくら出はれ」といって、槌をふりました。ところが、少し早口にいったもので、たくさんの「小盲」が出て来ました。

以上を次のように、表にしてみる。

	メルヘンの数	原語	会場所	住みか	日常生活	色	容貌	富	贈物	好悪	性	歳
主人公・ 援助友好型	6篇(25)	Zwerglein	ガラス山の中	ガラス山	鳥の食事の世話	?	小さい	?	なし	?	男	?
	28,	Männlein	突如森への道	?	?	?	小さい	?	黒い槍	無垢、善	男	?
	53,	Zwerg (lein)	森の中の家	森の中の家	金、鉱物掘り	?	小さい	黄金	なし	美、善	男	?
	62,	Männchen	呪われた城中	呪われた城	?	灰	?	?	なし	?	男	?
	68,	Männken	突如森への道	?	?	?	小さい	?	変身を見抜く	?	男	?
	163)	Männchen	森の中の家	森の中の家	?	白	白髪、ぼろ服	?	なし	?	男	老人
主人公・ 実命行型	3篇 (91,	Erdmänneken (Männeken)	無人の城中出現 (笛次第)	?地中	?	?	非常に小さい	?	井戸から出す	?勇敢	男	?
	113,	Erdmänneken	森、池、山 (要望次第)	地中	?	?	?	?	森伐採、池かえ堀、 城構築	?	男	?
	116)	Männlein (Männchen)	井戸、宿、城 (要望次第)	?	?	黒	小さい	?	井戸脱出、魔女殺し、 王様降参等	?	男	?
善悪 対応型	5篇 (13,	Haule- männchen (die Kleinen)	森の中の家	森の中の家	?	?	小さい	?	美、金貨、お妃 醜、ガマ、残酷死	礼儀、善、 施し	男	?
	64,	Männlein (Männchen)	突如森の中で	?	?	灰	?	?	黄金の鵜鳥、水陸 両用舟、変身超能力	善、施し	男	老人
	97,	Zwerg (Männchen)	突如(山への) 道で	?	?	?	小さい	?	鉄の鞭、パン、命の 水の場所	礼儀	男	?
	165,	Manndle	突如城への道で	?	?	鉄色	小さい	?	林檎、陸舟、兎百 羽の番等魔力発揮	正直好き	男	?
	182)	Kleine Männer u. Frauen (das kleine Volk)	丘の上で	?	?	真っ白 髭、他?	胸までの真っ白 な髭の老人、異 模様の服、他?	?	石炭(純金)、石炭、 瘤	欲張りを 嫌う	男女	老人 他 多数
悪者型	1篇 (166)	Männchen (Zwerk)	荒れ果てた城に 来る	?岩穴	?監視役で、お 姫様をいじめる	?	小さい、萎び て縮んでる	?	死ぬと姫の鎖が解 ける	?	男	老人
魔女 類似型	1篇 (161)	Zwerge (der Kleine)	森、川辺、原野で	這い上がれぬ 地中の穴の中	盗み、薪割り、 釣り	?	萎びた顔、赤 い目、長白髭	黄金 真珠	呪いで王子を熊に 変える	善行をな じる	男	老人
悪魔型	2篇(92 100)	Männchen Männchen	突如耕地に 突如森の中で	? 地獄	?人の子を取る 死者の釜を炊く	黒?	小さい 小さい	お金 純金	お金 ごみ屑(純金)	輪を嫌悪 不潔好き	男 男	? ?
悪魔 類似型	1篇 (55)	Männchen (Männlein)	部屋に来る	高い山の森 の角の家	?	?	小さい、滑稽	?	薬を黄金に紡ぐ	名が知れ る事嫌悪	男	?
魔法 使い型	1篇 (110)	Männchen	突如藪の側で	?	働けない貧乏な 老人	?	小さい	?	吹き矢、胡弓、頼 みを拒めぬ力	善、施し	男	老人
小妖精 型	4篇 (39-1)	Wichtel- männer (Männlein)	部屋の中へ来る	?	?靴職人	?	裸で小さく かわいらしい	?	夜中靴を仕上る	?服	男	?

	メルヘンの数	原語	会う所	住みか	日常生活	色	容 貌	富	贈 物	好 悪	性	歳
小妖精型	39-2	(die Kleinen)	山中の住まい	山中	普通?産婦もいる	?	?	黄金	黄金	?	男女	?
	39-3	(Wichtel-Männchen)	揺籃	?	取り替え子を置く	?	?	?	子を盗み、取り替え子を置く	?	男	?
	175)	(Zwerg)	草原	岩穴	?	?	赤い服	?	?	月明かり	男	?
親指小型	3 篇		以下は、すべて人の子であり、本来の小人、異次元の世界の存在ではない。小人の冒険のメルヘン。									
	(37, Daumesdick		農民の子		親指大						男	
	45, Daumerling		仕立屋の子		親指大						男	
90) Däumling		農民の子		親指大→巨人						男		
比喩型	2編(19	Dwark	巨人から小人位まで、背の高さの順に並んだ近衛兵の内最も小さい近衛兵の比喩。									
	36)	Kobold	「袋から棍棒出よ!」の棍棒が「お膳や御飯の支度!」と「金貨を吐き出す驢馬」を盗んだ宿屋の主人を殴り倒して奪う。主人はその棍棒を Kobold と呼んで恐れた。Kobold は Wichtelmännchen (小妖精) との説明もあり、そのいたずら好きな面の比喩。									
	昔話の数	小人の表現	会う所	住みか	日常生活	色	容 貌	富	贈 物	好 悪	性	歳
主人公援助・友好型	1話	竹の子	竹山の竹の中から出てくる	天	?	?	小まか子供五寸ばかり1234歳	?	呪(まじない)で三吉を待にする。竹の中から出してもらったお礼	?	男	老人
	童児	五寸ばかりの人										
貧乏神型	1話	貧乏神	家の中	家の中	?	?	みにくい	?	米俵と魚荷	?貧乏好き熱さ嫌い	男	?
善対応型	3話	山の神とほろき神	土蔵の屋根の上に、道中で、あばら屋で	? あばら屋	? 神? 雉の一声の里へ行く大根料理でもてなす	?	紫のひただれを着、赤い扇を広げ、舞を舞う	?	?酒(女房は金持ちに、夫は貧乏)	?小心者嫌い	男が女に变身	老人若い
	塩ふき臼	小人	森の神様のお堂の後の穴の中	穴の中	?	?	?	?	挽臼	麦饅頭	男	?
	宝ふくべ	童	ふくべの中から出る	観音さまと一緒?	?	?	?	?	金七と孫七:ふくべ(酒、団子、ご馳走)強引にふくべを買い取った博労には何も出てこない。	?信仰心強欲嫌い	男	子供
一寸法師型	3話		以下は、一応人の子という設定で、上記の小人たちとはまったく種類が違う。									
	たにし長者	たにしの子			百姓の子(木神さまの申し子)		たにし→立派な男(人間)		長者に婿入り		男	
	一寸法師	一寸法師			仲のよい夫婦の子		指の先くらいの大きさ→普通の侍		鬼から姫を救う		男	
五分次郎	五分次郎			翁婆の婆さんの左手親指から誕生		五分ばかり		鬼退治		男		
身体縮小型	1話	宝下駄	虫のように小さい者。	家の庭	これは、ある欲の深い人間についての昔話である。本来の小人ではない。欲深い伯父が宝下駄を奪い取り、小判を出し過ぎたため、虫のように小さくなった。					強欲嫌い	男	伯父
洒落型	1話	かぶ焼き甚四郎	小盲	河童からもらった「延命小槌」で「米と倉」を出そうとして、早口で「こめくら出はれ」と言ったため、「小盲」がたくさん出てきたという笑話								

第3章 グリム童話と『日本の昔ばなし』の小人の比較

表と上記の小人の登場場面からどのようなことが読み取れるであろうか。

まずグリム童話から考察することにする。われわれがグリム童話に登場する小人に抱いている漠然としたイメージとは違うかもしれないが、何らかの意味で、主人公に味方する小人、一言で言えば、善良な小人がグリム童話には圧倒的に多い。非常に厳密に考察するならば、悪者の小人が登場するメルヘンは「悪者型」、「魔女類似型」の2篇だけで、全体の約7%である。「悪魔型」の『黄金の山の王様』に登場する悪魔の小人ですら、12年後に子供をよこすなら金は欲しいだけやるという契約を交わすが、いざその履行となると、商人親子に反対され、話し合いで決着する。また『悪魔の煤だらけの兄弟』の小人も、兵隊さんを7年間従僕にした代わりに、兵隊さんに純金を一杯やる。兵隊さんにとって、7年間の奉公はつらいものではあるが、主人の小人は、たとえ悪魔と呼ばれていても、それほど悪者ではない。「悪魔類似型」の『ル

『ルンペルシュティルツヘン』の小人も、藁を黄金に紡いでやる代わりに、子供をとろうとするが、自分の名前を当てれば、子供はとらないと言い、名前を言い当てられて、実際子供をとらなかった。「小妖精型」で、取り替え子を置いていく代わりに、子供をさらっていった小人も、取り替え子が卵の殻でお湯を沸かすのを見て笑うと、誘拐した子を返しにやってくる。両者とも悪者というより、滑稽な存在である。

ところで、「親指小僧型」の小人の話はメルヘンとしては非常に有名であるが、その種の小人は実は人間の子である。また、『漁師とその妻』に出てくる小人は、人間そのものである。そして『お膳や御飯の支度、黄金を吐く驢馬、棍棒よ袋から出よ』の小人は、単なる比喩に過ぎない。これらは本来の小人ではなく、考察の対象から除く。そうすると、本稿の考察の対象となる本来の小人、いわゆる異次元の世界の存在としての小人が登場するメルヘンは、「主人公援助・友好型」、「主人公の命令実行型」、「善悪対応型」、「悪者型」、「魔女類似型」、「悪魔型」、「悪魔類似型」、「魔法使い型」、「小妖精型」の計24話である。

これは大きく2つのグループに分けることができる。つまり、Wichtelmännchen (Wichtelmänner) と呼ばれる「小妖精型」の小人とそれ以外の小人である。後者を仮に「通常の小人」と呼んでおく。前者は「小妖精型」の4篇と「悪魔類似型」の1篇の計5篇である。「悪魔類似型」の『ルンペルシュティルツヘン』の小人は、金田鬼一氏も解説しているように、Kobold すなわち Wichtelmännchen (Wichtelmänner) であると思われる。それゆえ、表では別になっているが、「小妖精型」として一緒に扱う。後者は「主人公援助・友好型」、「主人公の命令実行型」、「善悪対応型」、「悪者型」、「魔女類似型」、「悪魔型」、「魔法使い型」の計19篇である。

では、まず前者の「小妖精型」である。

ここに属する小人の特徴は、第1に、普通の家にやってくることである。これは、全5篇のうち、3篇がそうである。これは後者の小人にはまったくないことで、極めて対照的である。残りの2篇で、小人たちに会う場所は、山中の彼らの住まいと草原である。草原で、赤い服を着て輪舞する『お月さま』の小人たちの居場所、住みかは岩穴の中である。彼らが「家の精」だとか「山の精」、「地の精」だとか言われているのもうなずける。5篇のうち、2篇で小人の居場所が分からないのも、彼らが「家の精」だからであろう。

第2番目の特徴は、『小妖精』の第2メルヘンで、産婦 (die Kindbetterin) が登場しているように、女の小人がいるということである。女の小人がいるのは、例外中の例外である。金田鬼一氏など「一寸ぼうしは男ばかりです。おばあさんの一寸ぼうしというものはありません。」(完訳グリム童話集第2巻151頁)と、女の小人はいないと、断言しているくらいである。後者(「通常の小人」の『小人族の贈物』)のなかにも、女がいるが、実はこれは厳密な意味では小人ではない。ドイツ語は、das kleine Volk とか kleine Männer und Frauen となっており、厳密に訳せば「背の低い民族」、「背の低い男女」となるであろう。しかし、これらの「背の低い民族」の振る舞いは、他の小人たち、特に前者の小妖精 (Wichtelmänner od. Kobold) に非常によく似ているので、「小人族」、「小人の男女」と理解してもよいであろう。そうすると、女の小人がいるのもうなずける。小妖精たちのなかに女がいるのは、小妖精が民間に伝承されてきた古い精で、普通に男の精、女の精がいた時代の名残だからである。「エルフェとかヴィヒテは小人に近い存在でスカンディナヴィア、ドイツ、英国の民間伝承に多く登場する。ゲーテやヘルダーが魔王 (エアケーニヒ) と名付けたのは、このエルフェを統括する王である。

エルフェは踊りと音楽を好み、月夜には森や山の岩場、牧草地で楽しく踊るのが見られるという。」(『ヨーロッパの心 ゲルマンの民俗とキリスト教』植田重雄著、丸善ライブラリー136、30～31頁)『お月さま』に登場する Wichtelmännchen (Zwerg) は、まさにこの通りで、月明かりを喜び、姿を現して、輪舞する。実は、今述べたばかりの『小人族の贈物』に出てくる das kleine Volk とか kleine Männer und Frauen は、月夜に丘の上で、歌を歌いながら手をつないで輪舞をしているところからしても、また他の指標からしても、私は、通常の小人というよりも、小妖精(ヴィヒテ) だろうと思っている。たとえそれが小妖精そのものでなくとも、少なくとも古くからの小妖精を反映した小人であるのは間違いないであろう。これを「善悪対応型」に分類したのは、小人が主人公に違った対応をとったからである。

第3に、小人と主人公との関係があまりはっきりしないか、小人自身の好悪がまったくといっていいほど不明であるのに、主人公の(善良だが貧しい)靴屋に代わって、夜中に靴を仕上げたり、(どんな人物か不明の)粉屋の娘に代わって、藁を紡いで黄金にしたり、(勤勉で清潔好きな fleißig und reinlich) 洗礼立会人の女中を手厚くもてなし、おみやげに黄金を持たせたりする。またこれとは逆に、(どんな人物か不明の)ある母親の子供をさらって、取り替え子を置いていく悪さをする。後者(通常的小人)もよくそういう行為にでるが、違いは、後者の場合、主人公の性格、人柄を小人たち自身がはっきりと見極めて、主人公の人柄に応じて異なった行動にでたり、主人公の命令や要望があって、それに従うところである。

第4に、それと関係あるが、小人自身がどんな人物のために力を発揮しようとしているのか、そしてどんな人物に悪さをしようとしているのかわからない。

『ルンベルシュティルツヘン』に出てくる小人は、藁を黄金に紡ぐ代わりに子供をよこせという要求をする。この点で、悪魔に似ている。しかし、悪魔とはどこにも書かれていない。しかもその小人は、呪いもしないし、魔法もかけない。地獄とも関係がない。後者には、呪いや魔法、地獄に関係する小人が多い。そればかりか、魔法使いや魔女のような小人、悪魔の小人さえいる。「小妖精型」の小人はすべて、呪いだとか、魔法だとか、地獄にはまったく関係がない。これが第5の特徴である。

次は、後者の小人である。

後者の小人の特徴は、まず第1に、いろいろな小人がいるということ、多様であることである。悪魔の小人もおれば、人を呪って熊にする魔女のような小人もいるし、主人公の意のままに行動する小人もいれば、善人には想像もできないような援助や贈物をするのに、悪人は徹底して懲らしめたりする小人もいるし、また、まったくの悪者の小人もいる。したがって、小人の性格に応じて、個別に考察する必要がある。

しかしながら、明らかに主人公の味方をする小人が圧倒的に多い。後者19篇のうち「主人公援助・友好型」が6篇、「善悪対応型」が5篇、「主人公の命令実行型」が3篇で、74%を占める。これが第2の特徴である。

個別の考察は、説明の都合上、顕著な特徴がある「善悪対応型」の小人から始めることにしたい。

まず第1に、小人の好悪が非常にはっきりしていることである。

第2に、小人は、自分の好む主人公には、超自然的、超現実的な力を発揮したり、主人公が成功し、幸せになるうえで不可欠な贈物をするが、自分の忌み嫌う登場人物は、徹底して懲らしめるということである。『森の中の3人の小人』では、礼儀正しく、惜しみなく施しものを

し、言われたことを素直に実行する善良な継子娘には、小人たちは、「日増しに美しくなること」、「一言しゃべるごとに口から金貨が出ること」、「王様のお妃になること」という贈物をするが、挨拶もせず、無礼で、けちで、言われたことをやらない実の娘には、「日増しに醜くなること」、「一言しゃべるごとにガマガエルが口から出てくること」、「不幸な死を遂げること」という贈物をする。まったく極端な対応ぶりである。『黄金の鵝鳥』では、阿呆の末っ子が *weil du ein gutes Herz hast, und von dem Deinigen gerne mitteilst*, なので、小人は、末っ子が持っていた灰のお菓子と酸っぱいビールを卵のお菓子と良質のぶどう酒に変えてやったばかりか、黄金の鵝鳥をプレゼントした。そして王様から課せられた難題、地下室一杯のぶどう酒を飲み干すこと、国中のパン粉で作った巨大なパンの山を1日でたいらげることも、末っ子に代わってやってやる。このようにして、末っ子はお姫さまをもらい、やがて王様になった。ところが、小人に冷淡な態度をとった長男と次男は、小人のせいで、長男は腕を、次男は脚を斧で切るはめに陥った。『命の水』では、礼儀正しく小人に応答した末の王子には、小人は「命の水」のありかを教え、「命の水」をとってくるのに必要な「鉄の鞭と小さな丸パンを2個」を与えた。しかし、小人を「ちび」呼ばわりして、相手にせず行ってしまった兄二人は、細い峡谷に閉じ込めてしまった。『グライフ鳥』では、阿呆だが正直な末っ子のハンスには、小人は、ハンスの持っていた粘土をお姫さまの病気を治すことのできるりんごに変えてやったうえに、水陸両用の舟も造ってやるし、兎100羽の番を無事こなすようにもしてやり、ハンスがお姫さまをもらい、王様になる手助けをしてやった。ところが、小人に嘘をついた兄二人の王子は、小人のせいで嘘が本当になり、お城からたたき出された。『小人族の贈物』では、小人族の言うままに踊りの輪に入り、おとなしくしていた仕立屋さんと金細工師に、小人たちは石炭（後で純金に変化）をお土産にやった。ところが、もっと純金が欲しいと思って、もう一度出かけて行った欲張りの金細工師は、単なる石炭しかもらわなかった。そればかりか、前にももらった純金まで石炭に変わっていた。瘤も背中だけでなく、胸にもついた。

第3に、この種の小人たちは、まったく富を持っていないということである。その理由は、小人たち自身が超自然的で不思議な力もしくは贈物を持っているので、それ以外の富、例えばお金とか黄金を必要としないからであろう。

第4に、この種の小人たちは、どこに住んでいるのか、日常何をしているのか、さっぱりわからないということである。これは、小人のなかでも、この種の小人たちが、人知れずして、最も驚異的な超能力を発揮する、いわば異次元の世界の存在に最もふさわしい、神さまに近い小人だからかもしれない。例外は、『森の中の3人の小人』である。彼らは森の中の家に住んでいる。

第5に、この種の小人たちとの出会いは、『白雪姫』のように、娘が森へ逃げて行き、小さな家を見つけて、そこに入って寝ていたら、小人が帰ってきて出会うというパターンの出会いではないということである。つまり、「主人公援助・友好型」の小人たちのように、小人たちが自分たちの世界にじっとして、主人公がそこに入って来て会うのではない。もう少し言えば、受動的な小人たちを、主体的、能動的な主人公が発見するという出会いではない。「善悪対応型」の場合、主人公が突如小人に出くわすにしても、どちらかという、小人の側から、あるいは小人の方から主人公に接触をはかったといえなくもない出会いである。小人たちの住む世界と人間の住む世界（家）があり、両者の出会いは、どちらかという、その中間、もう少し厳密に言えば、小人たちの住む世界の中ではあるが、人間が生活のために出入りするよう

な世界（森に入った所等）である。小人たちが人間の世界に接近し、主人公に会おうとしているかのように見える。ただし、「小妖精型」の小人たちのように、人間の世界の、しかも人間生活の中心である家の中に入までは入ってこない。これに対し、「主人公援助・友好型」では、例外はあるが、完全に小人たちの住む世界での出会いである。例外は、『唄を歌う骨』の森への道での出会いと『泥棒とその師匠』の森へ（で？）の道での出会いである。これらの場合、小人が積極的に主人公の力になろうとして、自分たちの世界から一步出て、人間の世界に接近していったかのように見える。しかし、この二つのメルヘンは、形式上は「主人公援助・友好型」に分類されているが、内容上は「善悪対応型」、あるいはそれとほぼ同じなのである。特に前者の『唄を歌う骨』の小人は、内容、実質からすれば、「善悪対応型」の小人に属する。

それでは、小人との出会いを具体的に見ていくと、『黄金の鵝鳥』では、森へ入ると小人に出くわし (begegnete)、『命の水』では、山へ行く道に小人が立っていて (stand da ein Zwerg auf dem Weg) 主人公に話しかけた。『グライフ鳥』では、お城へ行く途中で出くわした (begegnet)。『小人族の贈物』では、仕立屋さんと金細工師が旅に出たとき、小人たちが丘の上で、手をつないで、歌を歌いながら輪舞していた。これは、例外とも言えるが、実際は小人たちの歌声が大きく、主人公がそれに引き寄せられて見に行き出合ったのである。目立つ歌と踊りという点では、小人たちは積極的であり、少なくとも、丘の上は、小人たちの住む世界ではない。自分たちの世界からは出てきている。ただし、人間に積極的に接触しようとしたり、主人公たちを助けようとしてはいない。もっとも、この『小人族の贈物』の小人は、すでに述べたように、厳密な意味では小人ではない。小妖精である。したがって、例外とも言いきれない。『森の中の3人の小人』では、主人公が森へ入ると、小さな家から小人が3人外を覗いていた (daraus guckten drei kleine Haulemännchen,)。これが唯一の例外であろう。ただ1点だけ『白雪姫』と違うのは、小人たちが家から外を覗いていたことである。あたかも継子娘が来るのを待っていたかのように。継子娘の方は、雪の積もっている真冬、継母から紙の服を着せられ、オランダチゴを取ってこいと言われて、森へやってきただけなのである。これが、唯一「小人たちの方から」と言えなくもない点である。そして次のことも考慮する必要があるだろう。森は、特に奥深い森は、歴史的にも、メルヘンの世界でも、異次元の世界とは言えないが、異次元の世界のものたちがいる場所である。人間たちが入ることを受け入れ、生活に欠かすことのできない恵みを与えてくれる森は、森の周辺部であり、森のほんの一部に過ぎない。そこですら、人間の生活圏とは一線を画されていた。「山岳、森林のような濃厚に自然をのこしているところは、昔も今もなかなか人間の近付きがたいところである。都市は城壁をかまえ、法令をしき、その統治のもとで市民は安穩に生活することができた。ヨーロッパには村でさえ、石壁で囲んであるところがある。耕作された畑と牧草地、その近傍の林や森などは文化によって秩序づけられ、人間の手の及ぶところである。それ以外の荒野とか森や山は別の領域であった。」(『ヨーロッパの心 ゲルマンの民俗とキリスト教』同上26~28頁) 森(山)のこのような位置を考えると、『森の中の3人の小人』で、森の中の家から外を覗いている小人も、森へ入ったところ出会う小人も、山へ行く道に立っていた小人も、城へ行く道で出くわした小人も、丘の上で輪舞していた小人も、森や山の中の距離(森の奥深くか、森に入ったところか、山への道か)にかかわりなく、すべて自分たちの世界のなかで、あるいは、自分たちの世界から一步出て、人間に接触を図っているかのように見える点では、大した相違はないのかもしれない。

では次に「主人公援助・友好型」の小人である。その最も大きな特徴は、小人からの贈物が

ない、ということである。唯一の例外で、「黒い槍」を弟にやる『唄を歌う骨』の小人は、例外とはいえ、実は「善悪対応型」の小人に限りなく近い。というのも、次のような事情があるからである。獐猛な猪を退治した者には、王様の一人娘を妻にやるという御触れに貧しい兄弟が応ずるが、「狡猾でずる賢い兄は高慢な気持ちから、無垢で愚鈍な弟は善意から立ち上がった。」そして兄は西から、弟は東から森に入ることになり、森に入って行った弟に小人がやって来て「お前の心は無垢で善良なので、この槍をあげる」と言う。この黒い槍さえあれば、いかに獐猛な猪といえども「平気」で、「危害を加えられることなく」退治できる。この小人の行為は「無垢で善良な弟」への決定的な援助で、兄へは小人は何もしていないものの、「狡猾でずる賢い兄」への事実上の懲罰だと言えないこともない。つまり、小人ははっきりと善悪に対応しているのであるが、兄に対して何もしていないだけである。小人が「無垢と善」を好み、「狡猾とずる賢さ」、「高慢」を嫌っていることも、「善悪対応型」の小人の特徴である。小人が忌み嫌う「狡猾とずる賢さ」、「高慢」に懲罰を与えるという1点が欠けているだけなのである。とはいうものの、弟を殺した兄は、弟の骨が兄が自分を殺したと唄を歌ったため、袋に入れられ生きてまま水死させられた。この不思議な唄に小人が全然関与していないのであろうか。というのも、次のような表現があるからである。「Weil aber vor Gott nichts verborgen bleibt, so sollte auch diese schwarze Tat ans Licht kommen.」小人（特に「善悪対応型」の小人）が神に最も近いことを思えば、兄の処罰は小人の関与もあつたととれなくもない。しかし、それは読み込みすぎの嫌いがあり、分類からすれば、やはり『唄を歌う骨』の小人は、「善悪対応型」ではなく、「主人公援助・友好型」である。というのも、この小人の分類表は、内容上、実質上の分類ではなく、形式上、事実上の分類だからである。分類、統計であるかぎり、形式上、事実上の分類以外は意味がない。しかし、統計がそういう性格を持つ以上、内容上、実質上の補足を必要としているのも事実である。

第2番目の特徴は、小人の好悪が不明であることである。例外は、『唄を歌う骨』である。これは前述したように、実質上「善悪対応型」の小人であるので、例外であったとしても何ら不思議はない。今一つは『白雪姫』である。この場合、白雪姫があまりにも美しいので、小人たちが喜んでること、魔女と思われる（mit Hexenkünsten, die sie verstand, 故）継母の襲撃に用心するように忠告していることから、美を好み、悪を嫌っている（つまり善を好んでいる）ことがわかるという程度のことである。

第3番目の特徴は、出会いの場所が小人たちの住む世界だということである。「主人公援助・友好型」の場合、ほとんどが主人公たちが小人たちの世界にやってきて、小人たちを見つけるというパターンである。これは、主人公たちに対して友好的ではあるが、何ら不思議な贈物をするわけでもなく、主人公たちの運命を決定するほどの積極的な行動にでるわけでもなく、どちらかという受動的な小人たちの態度と関係があるかもしれない。例外は『唄を歌う骨』と『泥棒とその師匠』である。この二つのメルヘンは、「善悪対応型」のように、小人と人間の世界の接点で両者が出会う。前者は内容上は「善悪対応型」なので、不思議はない。後者では、小人は、息子が小鳥に変身していることを父親に教えてやり、困っている父親を助けてやった。小人は贈物こそしないが、主人公（の一人）を積極的に援助する。この積極性と小人の方から人間の世界に近づいてくる出会いとは関係があろう。

第4番目の特徴は、小人たちの住みか、あるいは居場所がはっきりしていることである。それが不明なのはまたしても『唄を歌う骨』である。これは既述したとおり、実質的には「善悪

対応型」なので、うなずけることである。今一つは『泥棒とその師匠』である。これも前述したことと同じであろう。

次は「主人公の命令実行型」の小人である。

この場合の最大の特徴は、主人公が呼びさえすれば、小人はいつでもどんな所にでも現われるということである。第2番目の特徴は、主人公の要望さえあれば、小人はどんなことでも、現実の世界ではまったく不可能なことでも、いとも簡単にやってのけるということである。第3番目の特徴は、小人の好悪はないか、わからない、あるいはそれと無関係に主人公の命令を実行するということである。第4番目の特徴は、小人が富を持っていないということである。これは、おそらく小人がいつでも何でも、やってのける超能力を持っていることと関係しているであろう。第5番目の特徴は、小人たちの日常生活が不明であるということである。小人はどこにでも、必要なときに瞬時に現われるので、それは何ら明らかになる必要はないし、不明のままよいということであろう。

次は「悪者型」と「魔女類似型」である。「魔女類似型」の小人は、魔女のように王子を呪い、熊にしていたので、「魔女類似型」に分類しただけで、悪者であることに変わりはない。そこで、両タイプの小人は一緒に扱う。

この小人の第1番目の特徴は、主人公に悪事を働くということである。第2の特徴は、小人の容貌が他の小人と比べて、詳しく細かく描写されているということである。「悪者型」の『強者ハンス』の小人は、ein kleines altes zusammengeschrumpeltes Männchen とか、(der Zwerg) glinste den Hans an wie eine Meerkatze. と叙述されているし、「魔女類似型」の『雪白と薔薇赤』の小人は、einen Zwerg mit einem alten verwelkten Gesicht und einem ellenlangen schneeweißen Bart とか、Er glotzte die Mädchen mit seinen roten feurigen Augen an, と叙述が異常に詳しい。この赤い火のような目も魔女に通ずる特徴である。魔女については別稿で扱うこととする。第3の特徴は、小人が死ぬとともに、主人公が解放されるということである。「悪者型」の『強者ハンス』では、小人が死ぬと、お姫さまを縛っていた鎖が解けて落ちた。「魔女類似型」の『雪白と薔薇赤』では、小人が死んで、呪いが解け、熊皮が落ちて、熊が人間の姿(王子)に戻る。呪いと深く関っている。第4の特徴は、この小人は老人だということである。

次は「悪魔型」である。

何とんでもこのタイプの小人の最大の特徴は、小人が同時に悪魔であるということである。したがって、このタイプの小人の特徴は、同時に悪魔の特徴でもある。悪魔についても、別稿で扱うこととする。

第1の特徴は、小人が場所を問わず突如現われるということである。第2の特徴は、主人公と契約を交わすことである。『黄金の山の王様』では、黒い小人は、金を欲しいだけ与える代わりに子供をもらうという署名入りの証文を取る。『悪魔の煤だらけの兄弟』では、悪魔(小人)は、兵隊さんが7年間悪魔の従僕になって仕えれば、一生涯金に不自由させないという約束をする。第3の特徴は、この小人はきわめて裕福だということである。『黄金の山の王様』の小人はお金を無尽蔵に持っているし、『悪魔の煤だらけの兄弟』の小人は純金(=ごみ屑)を文字通り塵芥ほど持っている。第4に、この小人は、悪魔によくあることだが、輪の中にあるものに手を出せないか、輪を嫌がっている(『黄金の山の王様』)し、清潔なものに手出しをしないか、不潔を好む(『悪魔の煤だらけの兄弟』)。

最後は「魔法使い型」であるが、ここに属する『茨の中のユダヤ人』に登場する小人は、blau pfeifen することができる、つまり hexen することができると言われているので、「魔法使い型」にした。特徴は「善悪対応型」の小人とほぼ同じである。

さて今度は『日本の昔ばなし』である。

『日本の昔ばなし』に出てくる小人の話は、10話である。その内、「一寸法師型」が3話、「身体縮小型」が1話、「洒落型」が1話である。「洒落型」の『かぶ焼き甚四郎』では、延命小槌で「米と倉」を出そうとして、「小盲」が出たという駄洒落である。「身体縮小型」の『宝下駄』では、宝下駄で小判を出し過ぎた欲深い伯父が虫のように小さくなったという話で、虫のように小さくなったのは人間の伯父である。「一寸法師型」の小人たちも人の子である。これらは本来の小人ではなく、分析の対象からは除外する。そうすると、5話しかない。5話の内、3話が「善悪対応型」の小人で、「主人公援助・友好型」と「貧乏神型」がそれぞれ1話ずつである。統計上意味があるのは、「善悪対応型」である。

ただ、ここでグリム童話の「親指小僧型」と『日本の昔ばなし』の「一寸法師型」の比較をしておく。これらは分析の対象ではないので簡単にしておく。「たにし長者」のたにしの子は人の子であるが、水神さまの申し子でもある。また、一寸法師は住吉さまにお参りしてできた子である。そして五分次郎は観音さまに願をかけてもうけた子である。しかも婆さんの左手の親指から生まれた子である。このように、これら『日本の昔ばなし』の小人たちは、人間の子であるが、神々と深いかかわりあいがある。これが、グリム童話の「親指小僧型」の小人たちとまったく違うところである。「親指小僧型」の小人たちは、神との関わりはなく、純粹に人の子の冒険ものであるが、道徳的な香がする（KHM 37 と 45）。「一寸法師型」の小人たちは、神々と深く関っているが、道徳的な香りはしない。KHM 90 はいたずら物語である。

『日本の昔ばなし』の「善悪対応型」の小人と、グリム童話の「善悪対応型」の小人との大きな違いは、『日本の昔ばなし』に出てくる小人は好悪があまりはっきりしていないということである。実はこのことは『日本の昔ばなし』の小人全体にあてはまる。

『山の神とほうき神』では、塞の神やほうき神、山の神はどうも小心者が嫌いのようであるが、小人の好悪は分からない。ただし、この昔話は難しい。どうもこの三人の神様が三人の小人の老人のようであり、また若い美しい三人の娘となっているようでもある。そうすると、小人の嫌いなのも小心者かもしれない。ただ、小心者が嫌いだというのも、小心者の夫が落ちぶれて貧乏になり、離縁し家を追い出した女房が長者となり、その下男になるという話の筋から、そのように読み取れるというに過ぎない。夫のこの凋落ぶりと女房の繁栄には、小人の関わりがあったのは確かであろう。しかし、ほうき神の言うところによると、それは生まれる前からの運命でもある。とにかく、小人の好悪はこれこれで、それに基づく小人の仕業がこれこれだということが漠としてほとんど分からない。小人たちは神秘のヴェールに包まれている。それというのも、小人たちと主人公との直接的な関わりがないからである。また夫と妻の極端な貧富の運命が、小人の不思議な力によるものなのか、それとも小人をも含む神々の力、あるいはそれをも包み込む大きな運命、定めなのかが曖昧だからである。

『塩ふき臼』では、小人たちがひどく麦饅頭を欲しがるので、弟は饅頭をやって、挽臼をもらう。この臼は「打出の小槌」と同じで、右に回すと欲しいものが何でも出てくる。貧しかった弟は、この臼で、米、塩鮭、立派な家、土蔵、長屋、厩、馬七疋、餅、酒、菓子を引き出し、

にわか長者になった。金持ちでけちの兄がその臼を盗んで船に乗って逃げるとき、塩を挽き出したのはいいが、止め方を知らなかったので、大量の塩とともに海に沈んでしまった。この場合、小人の好悪ははっきりしている。饅頭好きである。しかし、それは主人公への好悪ではない。また小人と主人公の弟の関係も非常にはっきりしている。弟の持っている麦饅頭と小人たちの持っている挽臼の交換である。小人からの贈物の挽臼が結局兄弟の運命を左右することとなった。しかしである。ここにも伏線がある。貧しく、年越の晩になっても米がなく、兄の家に米一升借りにいって冷たく断られた弟が、麦饅頭を持っているはずがない。兄貴の家を出て、山を越えて行くと、一人の白ひげをのばした老翁がいて、「お前はどこさ行けや」とたずねた。弟が「今夜は年とりの晩だども、お歳神さまに上げる米がないので、あてもないがこうして歩いています」と答えると、老翁が麦饅頭をくれて、「あそこの森の神さまのお堂のうしろに行くと穴があるが、そこに小人たちがいてお前に饅頭をくれろというから、金でも物でもなくただ石の挽臼ととりかえるならばやってもいいといえ。小人たちはひどく饅頭をほしがるから」と教えてくれたのである。老翁・お歳神さま・麦饅頭・森の神さまのお堂・小人たち、ここには深いつながりがありそうである。不思議な贈物をくれたのは、直接的には小人たちであるが、それがもらえるように導いたのは、麦饅頭をくれた老翁である。その老翁は、お歳神さまに上げる米もないということを知り、小人たちの話をする。その小人たちは森の神さまとかかわりがありそうだし、老翁も何か神通力がありそうである。つまり、この昔話の特徴は、小人自身が、貧しいが素朴な信仰心を持つ弟の話を知り、あるいは、グリム童話によく見られるように、何も言わない主人公（弟）の心や性格を神様のように見抜いて、弟に挽臼をやったのではない、ということである。小人の洞察力も判断力も見られないのである。主体性そのものがないのである。したがって、小人がどういうものかは見えてこない。

『宝ふくべ』では、ふくべの中から飛び出してきた、金七と孫七という二人の童が、貧しい爺が欲しいというご馳走（酒、団子）をふくべから出してやる。これは小人とは言われていないが、ふくべの中に入っていた位だから、小人であろうという前提での分析である。たちまち爺さんはお金持ちになった。ところが、ある博労が、いやがる爺さんから無理やりふくべを買い受け、殿さまにそれを献上し、村でももらいうけようとして、お城に持っていった。しかしご馳走どころか雫一滴も出てこなかった。博労はお城の外につまみ出された。同じふくべが、爺さんと欲深い博労に対して明らかに違った、両極端の対応を見せている。しかし、これは小人の金七と孫七のせいなのであろうか。金七と孫七が関わっていることは確かであろうが、その背後に観音さまがいる。というのも、爺が何年たってもよい福運がむかないので、清水観音にまいって、七日七夜のお籠りをして、帰る途中に、後からふくべが一つ転がってきたからである。中から出てきた金七と孫七も「爺、おらたちは観音さまからのいいつけで、爺のところに来た」と言っている。ふくべが宝になるか否かは、明らかに金七と孫七の直接的な仕業に違いないが、そのような不思議な力を発揮させた、あるいはふくべという贈物をしたのは観音さまであることも明らかである。ただ、この昔話では、小人の金七と孫七と主人公の爺との直接的な関わりがあるので、それほど込み入ったところはない。

「主人公援助・友好型」の小人はどうであろうか。『日本の昔ばなし』で、「主人公援助・友好型」の小人が登場するのは、『竹の子童児』だけである。ここに登場する竹の中から出てきた童児も小人とは言われていないが、「小まんか子供」、掌のひらに乗る「五寸ばかりの人」と表現されているので、小人と理解して、考察の対象とする。この竹の子童児は、グリム童話の

「主人公援助・友好型」の小人とほとんど同じである。違いは、竹の子童児が天人だということである。グリム童話には様々な種類の小人が登場するが、天人の小人は皆無である。天人だけあって、三吉を呪（まじない）で、三吉がなりたかったお侍にしてやる。このように人の身分を変えることは、グリム童話の小人はしない。もっとも『雪白と薔薇赤』の小人のように、呪（のろ）いで王子を熊に変えたり、『森の中の3人の小人』のように、娘を日増しに美しくしたり、日増しに醜くすることはある。

最後は「貧乏神型」の小人である。このタイプには、『貧乏神』の小人が属する。貧乏神という発想も『日本の昔ばなし』に特有であるが、そもそもグリム童話には、地の精や山の精、家の精のように、民衆の信仰心と結びつくような小人はいても、神さまの小人というものはない。

まとめ

最後に、グリム童話と『日本の昔ばなし』に出てくる小人を比較しながら、その特徴を総括的に叙述する。

まず、グリム童話では、小人が比較的良好よく登場するが（14%）、『日本の昔ばなし』には小人はほとんど出てこない（4%）、と言えよう。また、グリム童話には色々な種類の小人が登場する。人間の善悪を判断して極端な賞罰的な対応をとる「善悪対応型」の神々に近い小人、地妖、小妖精から、魔法使いや魔女のように振舞う小人、悪魔そのものの小人まで、実に多様である。大きく分類するならば、「通常の小人」（「主人公援助・友好型」、「主人公の命令実行型」、「善悪対応型」、「悪者型」、「魔女類似型」、「悪魔型」、「魔法使い型」と小妖精（「小妖精型」と「悪魔類似型」）と「親指小僧型」の小人と「比喻型」の小人の4種類になろう。それら個別の小人の特徴についてはすでに述べたので、ここでは省略する。次に、グリム童話の小人たちは、悪魔、魔女のような小人はもちろんのこと、自分自身が直接魔法をかけなくとも、魔法や呪いに関係していることがよくある（KHM 25, 53, 62, 68, 163, 91, 113, 116, 97, 165, 166, 161, 92, 100, 110の15篇で、63%。「親指小僧型」と「比喻型」は除く。「小妖精型」も除くと79%）。しかし、全体としてみれば、悪魔の小人たちも含めて、小人たちは善良で、主人公の力になっている（93%）。例外は「悪者型」の『強者ハンス』と「魔女類似型」の『雪白と薔薇赤』である。ところが、小人たちは、体が小さいにもかかわらず、3時間で立派な城を建てたり、水陸両用の舟を造ったり、粘土をりんごに変えたり、石炭を純金にしたり、薬を紡いで黄金にしたり、この世ではありえない、超人的な力、超自然的な力を発揮する（KHM 68, 91, 113, 116, 64, 165, 182, 100, 55, 39-1の10篇）か、不思議な贈物（黒い槍、話すたびに金貨やガマが出てくる力、黄金の鵝鳥、吹き矢、胡弓等々）をする（KHM 28, 13, 64, 97, 165, 110の6篇）。合計16篇で、重複を避けると14篇、58%である（「親指小僧型」と「比喻型」は除く）。また、人間の生活圏とは別の世界や不気味な所、森や山、地中、地獄、呪われた城、荒れ果てた城などに住んでいるか、そこで出会う小人がほとんどである（19篇で80%。「親指小僧型」と「比喻型」は除く）。そして小人は、『小人族の贈物』と『小妖精の第2話』を除いて、すべて男である。前者は厳密に考えると、背が低いだけで、いわゆる小人ではない。後者は、古くから民間に伝承され信じられてきた家の精、山の精、地の精である。

グリム童話に出てくる小人たちの以上のような特徴を考えると、小人たちは、悪魔・魔女と

神の中間的な存在（典型は『お月さま』の小妖精）、厳密に言えば、神と魔女を除き、悪魔を含んだ中間的な存在、あるいは、そのような様々な異次元の世界のものが入り混ざった存在と言えるであろう。ヨーロッパの民間に古くから伝わる、家の精、山の精、地の精などの小妖精（Wichtelmännchen od. Kobold）、地妖（Erdmännchen）、森の精や神々、魔女、悪魔、キリスト教の教えなどの表象が混合して小人像が出来上がったのであろう。そこには、ヨーロッパやゲルマンの古い歴史、古くからの素朴な精霊・妖精信仰、圧倒的な力を誇示したキリスト教、グリム兄弟の考えが反映していると考えられる。例えば、植田氏はその一面を次のように叙述している。「人間に邪悪な働きをなすデーモンとしてチロル地方で語り伝えている山と森の精にオルクがいる。オルクは山のいただき、アルム、岩穴、谷間に棲み、極端に小人風であったり、腕や眼が欠けていたりするかと思うと、途方もない巨人になったり、動物の姿をとったりする。オルクは山や森の動物の主、森の守護の精であり、よき猟獣は彼の司るものという。コーボルト風な家の精にもなり、葡萄園やワイン製造所にまでは行って、いたずらをするともいう。元来オルクはラテン語のオルクスに由来し、キリスト教の下でいつしか悪魔的なものに変えられていったようである。」（『ヨーロッパの心 ゲルマンの民俗とキリスト教』同上47頁）しかし、どれがどう反映しているか、グリム兄弟の加筆や訂正がどうであったか、という面での実証は、ここでのテーマではない。

では『日本の昔ばなし』に出てくる小人たちはどうであろうか。『山の神とほうき神』では、3人の小人たちが主人公の夫と女房の貧富の運を左右したのであろうが、それが同時に神々の力でもあり、また神々よりも大きな運命のいたずらでもあった。3人の小人たちが夫と女房をどう思っているのか、具体的に何をしたのか、曖昧で、小人たちの姿、人格が霞んでいて、見えてこない。『塩ふき臼』では、貧しい弟をにわか長者にし、金持ちでけちの兄を海に沈めたのは、小人たちからの贈物の不思議な臼であった。しかし、小人たちが弟の人柄を判断して、臼を与えたのではない。小人たちは大好物の饅頭と臼を交換しただけである。この昔話でも、小人たちの背後に、素朴な信仰心のある弟の貧しさに同情し、小人から臼をもらえる法を教え、麦饅頭をやったばかりか、臼の使い方まで教えた老翁の不思議な神通力と小人たちの主のような森の神さまの存在と力があることを感じさせる。小人たちの姿としては、饅頭好き以上のものは見えてこない。『宝ふくべ』でも、貧しい爺をにわか長者にし、博労を痛い目に会わせたのは、ふくべであり、金七と孫七という童（小人）であるが、それは「観音さまからのいっつけ」でもあった。金七と孫七が、爺の七日七夜の清水観音さま籠りという淡い信仰心を評価して、自ら出てきたのではない。金七と孫七という童（小人）は、観音さまのお使いにすぎない。『竹の子童児』では、三吉を呪（まじない）でお侍にしてやったのは、竹の中から出てきた「五寸ばかりの人」（小人）である。それでも、竹の子童児は呪を教えただけである。直接呪を唱えたのは三吉である。しかもこの小人は天人である。天人の小人は自ら何でも知っていると言う。三吉の名前も知っていた。そうすると、知っていた三吉に竹の中から出してもらい、そのお礼に三吉を侍にしたのであるが、天人があらかじめ知っていた三吉に声をかけたのであるから、お礼という形をとってはいるが、三吉の望みをかなえるために登場したと言えなくもない。三吉がどういう人物か分からないにもかかわらずである。ちなみに、天人の小人は、グリム童話にはまったく登場しない。『貧乏神』では、ある夫婦が貧乏であったのは、家の中に小人の貧乏神が住み着いていたからであった。火をたくと、小人たちは熱いと言って、家から出て行った。長年いたお礼に小人たちは米俵と魚荷を置いていった。それからというもの、夫婦

は福々長者になった。夫婦が貧乏であったのは小人の貧乏神のせいなのは明らかであるが、福々長者になったのは、貧乏神たちを叱って、入れ代わるように入ってきた老人のせいかも知れない。いずれにせよ、小人の貧乏神が夫婦を評価して行動しているようには見えない。この小人も神様である。神さまの小人もグリム童話には登場しない。

以上で明らかのように、『日本の昔ばなし』に出てくる小人たちの大きな特徴は、小人が天人か神さま、もしくは神さまの使いのもの、神さまと非常に関わりの深い存在だということである。この場合の神さまは多神教的な神さまである。これがグリム童話の小人たちとまったく違うところである。

第2に、『日本の昔ばなし』の小人たちは、主人公が善い人物か悪い人物か、真面目か不真面目か、慎ましいか欲張りかを直接自分の目で見て判断し、行動しはしない。小人たちが判断しなくとも、神々が見定めたり、宿命によって主人公の命運がすでに定められているからかも知れない。いわば、小人たちは、目に見えない、姿なき神々、天人、運命の一つの力の体言者、具現者、人格である。これは『日本の昔ばなし』の小人たちすべてに共通している。例外的な『竹の子童児』の天人ですら、主人公の三吉の人柄を評価したわけではない。

そのせいであろうか、小人自身に主人公の運命を直接決定するような強烈な力と個性がない。これが『日本の昔ばなし』の小人たちの第3の特徴である。グリム童話の場合、『青い灯り』や『森の中の3人の小人』、『黄金の鵝鳥』、『グライフ鳥』、『悪魔の煤だらけの兄弟』、『ルンペルシュティルツヘン』などに登場する小人は、主人公の運命を直接左右するだけでなく、自らも超能力を発揮して活躍し、主人公たちと対等の役を演じ、メルヘンに欠かせぬ存在となっている。こういうところが『日本の昔ばなし』にはない。『竹の子童児』の天人の小人と『宝ふくべ』の金七と孫七の童が、そのようなグリム童話の小人に匹敵する。しかし、天人の小人は三吉を直接侍にするのではなく、侍になるための呪を教えるだけだ。ところが、この小人は、奇妙なことに、グリム童話とは逆で、完全に主人公となっている。不思議な力を発揮する小人としてではない。別の意味である。竹の中から声がし、竹を切ると、五寸くらいの小人が出てくる。子供であるが、年齢は1234歳である。しかも天人で、世界のことは何でも知っている。この世にはいない何とも不思議な存在だ。でもどこか可愛く人間的な存在で、聞き手を引き付ける。童児を竹から救い出し、侍にしてもらった三吉の方がむしろ脇役である。こんなことはグリム童話には絶対ない。「親指小僧型」の小人は別であるが、どんなに重要な決定的役割を演じて、小人自身が主人公になることはない。小人はあくまで主人公に力を貸し、主人公を盛り立てる脇役である。次に『宝ふくべ』の金七と孫七の童は、ふくべの中からご馳走を取り出す役を演じているが、打出の小槌、挽臼、延命小槌、宝下駄などのように、清水観音さまの贈物の宝ふくべが登場するだけでもさしつかえないかもしれない。しかし、金七と孫七が出てきたことで、ふくべの神秘的で不思議な話が、明るく、暖かで、人間的な話になっている。

だから、第4に、小人のすることが実に可愛い。小人が超自然的な能力を持っているとは言っても、呪を唱えさせて三吉を侍にするくらいである。超能力は超能力でも、グリム童話の小人の途方もない、想像を絶する超現実的、超自然的な能力に比べれば、実に可愛らしい、慎ましかな、いわば現実的な超能力である。不思議な力を発揮する小人の贈物から出てきたものも「米俵と魚荷」、「酒」、「酒、団子などのご馳走」、「米、塩鮭、馬、餅、酒、菓子」であり、少し豪華なところで、「立派な家、土蔵、長屋、厩」くらいであり、実に可愛い。

第5に、『竹の子童児』を除いて、小人たちに、独立した性格、人格、主体性が見られない。

小人たちは、神々の使いの者、あるいは、自分の思いを意のままに実現する神々自身の力を控えめに人格化したもののように見える。小人たちはどうか従属的なところがある。小人自身が神様である貧乏神ですら、老人に「きさまたちはまだこの家におったか、早くどこなりとも消えうせろ」と、ひどく叱られ、地面にひれ伏して「はいはい、…いま出て行くところでございます」と、まったくの低姿勢で、まるで下僕のようなものである。例外だと言った、比較的自立した人格の『竹の子童児』の天人も、「すぐ天に帰ろうごたつとばってん、恩返しせんば天に帰ってから、お姫さまにしかるるで、お礼ばしてから帰っとたい」と、お姫さまの顔色をうかがっている。

第6に、竹の子童児にしろ、貧乏神にしろ、金七と孫七にしろ、麦饅頭を欲しがる小人にしろ、『日本の昔ばなし』の小人たちは、みな可愛らしい。天人であったり、神々であったり、神々の使いの者であったりするのに、神秘的、宗教的なところがない。悪魔的なところや呪いはもちろんない。まるで人の子のようである。『山の神とほうき神』のどこか神秘的で祭司的な小人を除いて。

最後に簡単にまとめると、グリム童話の場合は、小人たちは、神と悪魔・魔女の中間的存在であったが、悪魔自身もいるように悪魔・魔女の方に傾いた存在で、魔法や呪いに関係することも多く、神秘的、地下的、地獄的な所があって、どこか不気味な感じのする存在である。また古くから民間に伝わる家の精、山の精、森の精、地妖、神々、魔女、悪魔、キリスト教などが入り混ざって小人像が出来上がったのであろうが、それは冷たく、人間から遠い存在で、キリスト教的倫理観も時に顔をのぞかせ、一神教の香がどこことなくただよっている。これに対し、『日本の昔ばなし』の小人たちは、中間的存在には違いないだろうが、悪魔や魔女的な所は一切なく、神々か神々に傾いた存在である。しかし神々の分身のような小人はもちろんのこと、神々や天人の小人であっても、地上的、人間的で、あけっぴろげで、子供のように笑ったり喜びを素直に表す。一言で言って、可愛らしい。『日本の昔ばなし』では、小人たちは、自然宗教的、多神教的雰囲気の中で、姿を現す、人間に近い存在で、とても親しみがある。